

防災・減災のページ

毎月11日掲載

巡回ワークショップ @東松島、石巻

むすび塾

【震災を経験して語り継いで】
ていのは未来に伝えたいこと。風化が進むにつれ、伝えたい思いは強くなっている。震災当時の経験したことを表現する言葉を持つていながら、阪神大震災に関する本などを読み、言葉を探してきた。同世代と話し合つて自分の役割を再認識できた。経験や環境の違いなどの壁を取り除き、議論を深めた。石巻高2年・雁部由多さん(17)

震災伝承へ決意新たに

高校生が視察・語り合い

河北新報社は昨年12月18日、通算62回目の防災・減災ワークショップ「むすび塾」を東松島、石巻両市で開いた。宮城県内各地の高校生が東日本大震災の被災地を巡る初めての企画。震災を経験した若い世代が果たすべき役割を話し合い、震災を教訓として生かすための体験を語り継ぐ決意を新たにしていた。

「目の前で流される人を助けられなかった自分に罪悪感を抱き、経験を話せるまで3、4年かかった」と述べた。当初は思いつきで参加していたという。「恐怖が和らぐと正面から向き合えるようになって、語りで吐き出して落ち着いた」と振り返った。議論では、被災者への気遣いから被害が大きい被災地ほど震災が語り継がれにくい現実が示されたほか、機会さえあれば当時の状況を話したいという「埋もれた語り部」が少なくないとの指摘があった。懸念される震災の風化に対しては、元東松島市鳴瀬未来中教諭の制野俊弘・和光大准教授が「聞くべきは風化よりも無関心。『未来の被災地』に痛みを届けるぐらいの姿勢でないと、言葉は伝わらない」と強調した。



津波が昇陸口押し寄せた時の状況を説明する雁部さん(右端)＝東松島市の大曲小



意見交換は2時間以上に及び、最後にそれぞれの思いを画用紙に書いて発表。石巻市の石巻河北ビルが会場。



津波で自宅が流れ、更地になった現場で当時の様子を語る志野さん(右端)＝東松島市野蒜

再生の拠点 相次ぎ開設

東松島市野蒜、大曲両地区は石巻湾に面する。東日本大震災では高さ約10・4メートルの大津波が野蒜海岸を襲い、野蒜で509人、大曲では326人が亡くなった。両地区の犠牲者は計835人と市全体(1110人)の75%を占める。鳴瀬川河口に広がる野蒜地区では昨年、地域再生の拠点となる施設が相次いで開設された。被災した野蒜小が閉校し、宮小との統合により宮野小が開設。11月には、JR仙石線新ルート(北側丘陵)の地に市内最大規模の防災集団移転事業「野蒜ヶ丘」地区が完成、野蒜市民センター、奥松島観光物産交流センターがオープンした。大曲地区は航空自衛隊松島基地に近く、県内有数の上質なノリ産地としても知られる。震災では大曲浜に約5・8メートルの津波が到達した。



【震災を経験して語り継いで】
ていのは未来に伝えたいこと。風化が進むにつれ、伝えたい思いは強くなっている。震災当時の経験したことを表現する言葉を持つていながら、阪神大震災に関する本などを読み、言葉を探してきた。同世代と話し合つて自分の役割を再認識できた。経験や環境の違いなどの壁を取り除き、議論を深めた。石巻高2年・雁部由多さん(17)



【参加して津波被災地を訪れた】
【今後に備えて】大震災が発生した際、地域住民が一斉に避難できる不安だ。震災から時間がたち、津波の恐ろしさが薄らいでいるのではないかと、自分自身が被災者として避難したい。過去に何度も大きな地震や津波から耐えてきた土地が多いと思うからだ。学校では災害科学科で学んでいる。地形や活断層など専門的な分野の学びを深めて将来に役立てたい。高1年・阿部大和さん(16)



【参加して津波被災地を訪れた】
【今後に備えて】大震災が発生した際、地域住民が一斉に避難できる不安だ。震災から時間がたち、津波の恐ろしさが薄らいでいるのではないかと、自分自身が被災者として避難したい。過去に何度も大きな地震や津波から耐えてきた土地が多いと思うからだ。学校では災害科学科で学んでいる。地形や活断層など専門的な分野の学びを深めて将来に役立てたい。高1年・阿部大和さん(16)



【参加して津波被災地を訪れた】
【今後に備えて】大震災が発生した際、地域住民が一斉に避難できる不安だ。震災から時間がたち、津波の恐ろしさが薄らいでいるのではないかと、自分自身が被災者として避難したい。過去に何度も大きな地震や津波から耐えてきた土地が多いと思うからだ。学校では災害科学科で学んでいる。地形や活断層など専門的な分野の学びを深めて将来に役立てたい。高1年・阿部大和さん(16)



【参加して津波被災地を訪れた】
【今後に備えて】大震災が発生した際、地域住民が一斉に避難できる不安だ。震災から時間がたち、津波の恐ろしさが薄らいでいるのではないかと、自分自身が被災者として避難したい。過去に何度も大きな地震や津波から耐えてきた土地が多いと思うからだ。学校では災害科学科で学んでいる。地形や活断層など専門的な分野の学びを深めて将来に役立てたい。高1年・阿部大和さん(16)



【参加して津波被災地を訪れた】
【今後に備えて】大震災が発生した際、地域住民が一斉に避難できる不安だ。震災から時間がたち、津波の恐ろしさが薄らいでいるのではないかと、自分自身が被災者として避難したい。過去に何度も大きな地震や津波から耐えてきた土地が多いと思うからだ。学校では災害科学科で学んでいる。地形や活断層など専門的な分野の学びを深めて将来に役立てたい。高1年・阿部大和さん(16)

助言者から



震災体験を伝えるためには、若い世代に受け止まれるような語りを残す必要がある。命を語る存在になつてほしい。思いを言葉にするのは難しい。どんな言葉でも、今は埋もれた語り部を発掘することも、ネットワークづくりも必要になる。大人に語る場を与えてもらうだけでなく、主体的に大人に働き掛けてほしい。

和光大准教授 制野俊弘さん(51)
被災地から積極的に痛みを届けたいと、災害への備えにはつながらない。
(元東松島市鳴瀬未来中教諭)



風化は悪い面ばかりではない。時間がたつて心の傷が風化するれば、生々しい傷が癒える。被災地では学校の統廃合が進み、被災程度が異なる地域の子もたちが集められた。経験の差が子どもたちの間に壁を作る。もやもやとしたまま諦めることができず、孤立させられていく子どももいるだろう。被災経験のない後継者たちを育てて発信することも距離は近く、言葉の力で、草むらになった場所にも街並みがよみがえる。大震災の遺産として若い世代の発信が重要だ。

若い世代の発信が重要

宮城教育大教授 田端 健人さん(49)

埋もれた語り部発掘を

和光大准教授 制野俊弘さん(51)

語りの機会 大人が用意

東北大特任教授 斎藤 幸男さん(62)



震災時は石巻西高(東松島市)の教頭で教員仲間と4日間、700人規模の避難所運営した。その当時の経験から自身が語り部となる機会を創出する。今、多くの人が急ぐ様子もなく歩いて避難していたことに触れ「自分も含め、大地震いコール津波の意識があられば」と嘆いた。

語り合いの総括で、2人以外被災者は「自分も語り部活動を始めたい」と意欲を語った。内陸の生徒からは、2人の子供を語り部と地元高校生のつなぎ役を果たしたい」との声も。意識を高め、自覚を促した若者の力を大人はもっと引き出したい。
(防災・教育室 藤田和彦)

若者の力 引き出そう

東日本大震災を長く語り継ぎ、教訓を今後の防災に生かすには、次代を担う若者の力が欠かせない。震災当時小学4～6年だった宮城県内の高校生が参加した「むすび塾」で、生徒たちは「震災の経験」を次世代に語り継ぐ決意を新たにしている。語り部としての役割を自覚する機会となった。決意の後押しともなったのは、石巻西高3年志野のかさん(18)、石巻高2年雁部由多さん(17)の2人の語り部活動だ。2人は、目の前で遭遇した災害犠牲者の現実と共に、後悔の思いを明かした。

振り返って

承に果たす役割を自覚する機会となった。

志野さんは、自分の繰り返していった祖父が亡くなった経緯に「もっと避難の話をすればよかった」。雁部さんは、多くの人が急ぐ様子もなく歩いて避難していたことに触れ「自分も含め、大地震いコール津波の意識があられば」と嘆いた。

語り合いの総括で、2人以外被災者は「自分も語り部活動を始めたい」と意欲を語った。内陸の生徒からは、2人の子供を語り部と地元高校生のつなぎ役を果たしたい」との声も。意識を高め、自覚を促した若者の力を大人はもっと引き出したい。
(防災・教育室 藤田和彦)

東日本大震災の体験や教訓を振り返り、専門家と共に防災や避難の課題を語り合ってみませんか。町内会や学校、職場など10人前後の小さな集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。